

二〇二二年度 入学試験問題

国 語

第三回

【注 意】

- ・ 試験時間は五〇分です。（八時五〇分～九時四〇分）
- ・ 問題は一ページから七ページまでです。
- ・ 解答はすべて解答用紙の解答らんに入入してください。
- ・ 字数制限のない問題について、一行分の解答らんに二行以上解答してはいけません。
- ・ 記号・句読点がある場合は字数に含みます。
- ・ 解答用紙に受験番号、氏名を記入してください。



洗足学園中学校

1 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

私たちは普段どこで生きていますか。少し問い方を変えるならば、私たちは普段どこを拠りどころとして生きていますか。

★ A・シユツツは、社会学が中心的に考えるべき主題として日常生活世界をあげ、その世界のことを「至高の現実 (the paramount reality)」と呼んでいます。至高とは、このうえなく優れている、最高の、という意味です。

A なぜ日常生活世界が「至高」なのでしょう。少し考えてみたいと思います。

日常生活世界とは、まず第一に、私たちが生まれてから死ぬまで拠りどころとして生きる、質量ともに圧倒的な現実であるということです。さらにそれは、私たちが、普段さまざまな多様で異質な現実と向きあい生きていくなかで、最終的にはそこへと帰還できる安定した基本的な現実でもあります。

今は、ネットでのゲームが世の中を席巻していますが、ネットがない一九八〇年から九〇年代は、ファミコンやスーパーファミコン、64などのゲーム機を使って、さまざまなゲームに私たちは夢中になっていました。息子や娘にせがまれて、数多くのゲームソフトを購入したのですが、実は私も当時ゲームに「はまって」いました。

たとえば「マザー」「マザー2」という傑作がありました。私はその「ドクトクなセカイカンや」「どせいさん」などユニークなキャラクターに魅了され、延々テレビ画面に向き合っていたことを思い出します。マザー2をやっているとき、私は確実に普段の雑事などは忘れ、日常生活を離脱し、ゲームで展開される世界に没入し、ステージをクリアしようと懸命になっていました。

B ステージをクリアし、ひと段落ついた瞬間、私は日常生活世界へと帰還しようと「そろそろやめようかな、明日の授業の準備もしなければならぬ」と思いました。これはいわば、ゲームの世界という、仮構の現実から私自身が日常生活世界へと引き戻されてしまう瞬間とも言えるでしょう。

(中略)
第二に、日常生活世界は、「生身の存在」としての他者と直接出会えるという意味でも、圧倒的な現実といえるでしょう。 C、ここでは「今、

「ここ」という瞬間に、声を聞き、ふるまいを見つめ、情緒を感じ取り、その状態を丸ごと了解することができるといえる。具体的な身体としての他者と出会い、交信できる可能性が満ちているのです。さらに言えばそれは、他者との出会いや交信の可能性を手がかりとして、常に新たな関係性や意味を創発できる可能性に満ちているともいえます。

たとえば、なぜ大学での推薦入試や会社への入社試験に面接があるのでしょうか。一〇分や一五分という限られた時間で目の前に座っている受験生に質問し、その答えぶりからいったい何がわかるのでしょうか。会社面接であれば、人柄や常識など企業にとって必要な「シツツ」や能力を確認する重要な機会であるといえるかもしれません。

しかし大学入試の場合、現実はずっと緩く漠然とした基準あるいは感覚による評価で面接が判断されているようです。あなたはなぜこの学科を志望されましたか。その理由をまず聞かせてください、という問いに対して大学案内にある「モンゴン」などを暗記し準備を周到にしてきた受験生は、ある意味、決まりきった返事をよどみなくしてくれます。私たちは、「またか」と思いつつ、しゃべり終わるのを待って、「よくわかりました。で、あなたはずなぜ社会学をやりたいか」と思いつて来たのですか」とさらに問いかけます。そこで自分の言葉を探しながら懸命に社会学を学びたい理由を語る学生もいるし、戸惑いを見せ、これ以上いっただい何を話せばいいのだろうと逡巡を隠せない学生もいます。

★ 逡巡を隠せない学生もいます。
(2) 相手が用意してきたことをすべて話し終えたのを確かめ、さらに問いかける瞬間、私は、目の前にいる学生さんと初めて「今、ここ」で向きあっていると感じることができるといえます。別に推薦入試面接のコツを語っているわけではありません。学力を判定する試験のほかに、なぜ私たちは面接をするのでしょうか。仮に限られた時間内ということであれ、やはりそこには、「今、ここ」で「生身の他者」と向きあうことしか得られないコミュニケーションの場があるという信奉が息づいているのでしょうか。

私たちは「今、ここ」という現在の瞬間に「生身の他者」と出会うことにより重要な意義を見出しているのです。そして、「今、ここ」で「生身の他者」と出会う機会が無数に満ちているのが、日常生活世界なのです。さて、私たちが普段暮らしている日常生活世界が「今、ここ」での他者との出会いの可能性に満ちているとしても、もし私たちが絶えず「今、ここ」で「生身の他者」と出会い、繋がりたいと思えば、生きていけるとすれば、そ

それはまたなかなかしんどいことではないでしょうか。「至高」がもつ今一つ重要な意味が「決まりきった」「あたりまえ」という言葉に象徴されるものなのです。

第三に、常に新たな関係性や意味をつくりあげる可能性がありながらも同時に、この日常生活世界のほとんどを構成しているのは、決まりきった他者理解や交信の仕方です。私たちはこのルーティーン（決まりきった、その意味で変わらない退屈な繰り返しの作業）をほぼ無意識に支障なくこなしていくことで「あたりまえ」に生きることができなのです。

D 渋谷駅前の巨大なスクランブル交差点。そこは一度に大量の人が渡ること世界的に有名です。そこを渡ろうとしているあなたは、目の前にやってくる大量の人々をどのように理解しているでしょうか。素敵なファッションをした人や奇抜な格好をした人には思わず目がとまるでしょう。また知り合いを見かければ、声をかけたりするでしょう。しかし大半の人々は「交差点を渡る」見知らぬ他者です。だからこそ、目の前から忙しそうにやってくる人々を過剰に見つめたりせず、声をかけたりしないで、ぶつからないように注意を払いながら、支障なく、あなたは大勢の他者のムレを上手にすりぬけていくのではないのでしょうか。

なにをあたりまえで、つまらないことを話しているのかと思われるかも知れませんが、でも、なぜ、どのようにして私たちが、「交差点を見知らぬ他者とともに支障なく渡ること」ができるのかを詳細にふりかえることは、日常生活世界を普段どのように私たちが認識し、生きているのかを考える重要な事例と言えるのです。

★援用すれば、交差点を渡る時、私たちは、他の人々を「同じように交差点を渡ろうとしている人」以上に余計な意味をこめて理解する必要はありません。つまり周囲の他者にどのような違いや特徴があるとしても、彼らを「交差点を渡る人」以上でも以下でも認識する必要はなく、ただ「交差点を渡る人」として私の前に立ち現われていけばいいわけです。なかなかくどい言い方でしたが、シュッツは、こうした日常的な他者認識を「類型的」な理解と呼んでいます。満員電車の中で身体を触れあいながらも一心にスマホをいじる他者は「乗客」であって、ホームに立ってアナウンスしている人は「駅員」と理解すれば、それでその場のことは十分足りているわけです。

このように指摘されて初めて気づくかもしれませんが、普段、私たちは

日常生活世界において、「類型」として他者を理解するための多様な実践的な知識を駆使しつつ、暮らしているのです。

これらの知識には、ただ目の前にいる他者を理解するためだけでなく、それぞれの場面で他者に対して、私ができるようにふるまえばいいのかなど、他者との関係の作り方、交信の仕方などの知識、いわば各場面で適切にふるまうための「処方箋」としての中身も含まれています。そして、こうした「処方箋」的な知は、広く言えば、★ガーフィンケルが述べる「人々の方法」の実践のなかで意味をもつのです。

日常生活世界には、私たちが普段、家族や友人など親しい人々だけでなく大勢の見知らぬ他者のなかで暮らしているための圧倒的な質量の「類型的」知、「処方箋」としての知が息づいているのです。そして私たちは、家庭や学校、友人たちとのやりとりを通して、こうした実践知を身につけて、日常をなるだけ支障なく暮らしていきます。言い方を換えれば、「類型的」知や「処方箋」としての実践知が、私たちの日常を「あたりまえ」な現実、適切に、知識を使って生きていけば普段はそれ以上反省する必要のないものとして、見事に構築しているのです。

こう考えてくれば、私たちの社会や他者との関係、繋がりのありようなどをふりかえって考察するうえで、さまざまな概念や理屈をつくり、いわば日常の「外」から説明するよりも、日常生活世界をつくりあげている多様な「あたりまえ」それ自体に降り立ち、その詳細に焦点をあてるほうが、いかに重要であるかが、わかるでしょう。

(好井裕明『今、ここ』から考える社会学)

- ★A・シュッツ……………オーストリア出身の社会学者。
- ★仮構……………空想によって作られたもの。
- ★創発……………作り出すこと。形成されること。
- ★逡巡……………ためらうこと。
- ★援用……………自己主張の助けとして、引用すること。
- ★ガーフィンケル……………アメリカ出身の社会学者。

問一

——(1)「さまざまなゲーム」の話は何を説明するためのものでしょうか。次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ゲームの世界は仮構の現実であることから、質量ともに圧倒的な日常生活世界の一部であるといえること。

イ 仮構の現実であるゲームは人々に日常を忘れさせ、一時的に夢中にさせる力をもっているが、最終的に帰還するのは安定した日常生活世界であるということ。

ウ 仮構の現実であるゲームは、若者だけでなく、多くの年代の人も夢中になりやすく、現実と仮構を混同させてしまうことが多いので、日常的に注意を払う必要があるということ。

エ 筆者がゲームに夢中になった時期があるように、仮構の現実はある段のありふれた日常生活世界よりも多様で優れた世界が表現されているということ。

問二

——(2)「相手が用意してきたことをすべて話し終えたのを確かめ、さらに問いかける」とありますが、筆者はその理由をどのように考えていますか。解答らんに三行以内で説明しなさい。

問三

——(3)「しんどい」とありますが、その理由についてふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 日常生活には、「今、ここ」での他者との出会いや新たな関係性や意味を創発する可能性があるが、大勢の他者に対してそれを行うのは無理があるから。

イ 日常生活には、「今、ここ」での他者との出会いや新たな関係性や意味を創発する可能性があるが、生身の他者と出会う日常生活は「至高」ではないから。

ウ 日常生活には、常に新たな関係性や意味をつくりあげる可能性があるがあるので、「決まりきった」「あたりまえ」という言葉に象徴されるように生きることが大切だから。

エ 日常生活には、常に新たな関係性や意味をつくりあげる可能性があるがあるので、「至高」がもつ今一つ重要な意味を無視してしまうことになるから。

問四

——(4)「あたりまえ」とありますが、あたりまえに日常を暮らすために私たちがしていることはどのようなことですか。——(4)より後の部分を用いて解答らんに三行以内で説明しなさい。

問五

——(5)「こうした日常的な他者認識を『類型的』な理解と呼んでいます。」とありますが、これはどのように認識することですか。解答らんに三十文字以内で説明しなさい。

問六

A D に当てはまる語を、次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし、記号はそれぞれ一回ずつ使用しなさい。)

ア つまり イ しかし ウ たとえば エ では

問七

——(ア)～(オ)のカタカナを漢字に書き直しなさい。

問八

本文の内容に当てはまるものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 質量ともに圧倒的な現実である日常生活世界は、ユニークな世界であるがゆえに普段の雑事を忘れさせるだけの力を持っていることから「至高の現実」と呼ばれている。

イ 私たちが普段どこを抛りどころとして生きているのかを考える際には、質量ともに圧倒的な現実であり、多様なあたりまえに焦点をあてている日常生活に目を向けていくことが大切である。

ウ 大勢の見知らぬ他者に出会い、暮らしているだけの知恵や習慣が無数に存在していることが日常生活世界の重要な点であり、それが日常世界が「至高」と呼ばれる最大の理由である。

エ 私たちが生きているうえで抛りどころとしている日常生活世界は、私たちが多様で異質な現実と向き合って生き、他者との出会いを得るための、重要な拠点となっている。

2 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

中学三年に進級して数日のうちに、⁽¹⁾千波と澄香はいつも連れだって歩いているようになった。まるで仲のいい親友のように。それは千波にとって、オズの魔法使いの劇でいうと、空飛ぶ猿からお供のブリキの木こりに昇格したようなものだった。

澄香と一緒に歩いていると、他のクラスの大勢の人が話しかけてくる。澄香は、相手が千波を知らない人だとわかると、

「この子、千波。今度同じクラスになったんだ。」と紹介してくれるのだった。

クラスでも、澄香と千波は自然に何人かの女の子たちからとり囲まれるようになった。順奈、亜矢、緑、風子。その六人グループがクラスで一番目立つようになるのには、時間はかからなかった。

千波は今まで、そんなふうに住立つグループにいたことがなかった。そういうグループで行動していると、なぜだかいつもライトが当たっているようで、晴れがましい気分になったし、自分自身が変わった気さえた。

けれど、ライトが当たっていることに慣れない千波にとつて、そこはそんなに居心地のいい所でもなく、そう長くいられる所でもなかった。

千波は知らなかったのだ。舞台の上では失敗は許されないことを。そして、さらに許されないのは、主役より目立つことだった。

後々、千波が⁽²⁾間違っただけをしたんだ、と思いついた最初の出来事は、委員決めだった。

千波は、一、二年とも前後期全て、図書委員を務めていた。読書が大好きで、本に囲まれているだけで、幸せな気分になる。だから、できればいつでも図書委員をしたいと思います。

でも、そう思っているだけでは、今まで積極的に立候補して、図書委員になつたことは一度もない。意欲がなかったわけではなく、目立つようなことをするのが苦手だったのだ。

それなのに、千波がずっと図書委員をやり続けてこられたのには、中学最初の一年の前期、誰もなり手がいなかったのが、幸いした。

議長が、再度たまたみかけるように、「だれか図書委員を引き受けてくれる人はいませんか？」

と聞いた時、千波は思いきって手をあげ、

「あのう、私やります。」

と **A** 名乗りをあげたのだ。それ以来、千波が図書委員になりたいのに、自分で手をあげられないでいると、クラスの誰かかれかが推薦してくれるようになった。

二年の後期で、副委員長になったのも、もちろん立候補したのではなく、それまでずっと図書委員をやり続けてきたという、在任期間の長さだけで推薦され、そして選ばれた、と千波は思っている。

三年前期のクラスの委員決めでは、その日が来る前から千波は決心していた。⁽³⁾今回だけは、自らすすんで図書委員に立候補しよう。

三年後期になると、受験が近づくので、一応委員になったとしても、委員会活動にはほとんど参加しない。つまり今回が、中学校で図書委員の仕事をする最後の期間ということになる。

二年の後期、千波は委員長八木の補佐をしながら、副委員長としての仕事を目いっぱいやってきた。それまでは、貸し出し当番など、割り振られた仕事をきちんきちんとこなしてきただけだったが、八木君は、次から次へといろいろな問題を提起した。

例えば、本を期限どおりに返却してもらおうにはどうしたらいいか。

返却日を忘れてしまうのだから、忘れないようにすればいいという意見が出された。その意見をもとに、貸し出す本に返却日を書いた葉をはさみこむことが決まった。葉は厚めの画用紙に、委員が思い思いに好きなイラストを描いたり、本の挿絵に一言添えて、その本を紹介する内容を書いた。葉はとても好評で、はさんだまま本を返す人はめつたになく、皆、本を読み終わった後は、自分用の葉として使ってくれた。

図書委員としての仕事は増えたが、先生方からも感謝されて、それまで以上にやりがいも出てきたし、図書委員の仕事に燃えるようになった。

そうやって、みんなで相談を重ねて、実際にうまくスタートさせたものもあったし、スタートまでもっていきけないものもあった。

まだ途中段階でストップしているものは、三年になってからも継続して議論を重ね、試行錯誤しながら、実現にもっていきかけた。そして、ちゃんと軌道にのせたところで、次の二年生にバトンタッチしたいと考えていた。そのためには、三年A組で図書委員に選出されないことには、どうにもならない。

そうして迎えた委員決めの日だった。いつもの千波なら、のんびりと推

薦してくれるのを待っていただろう。でも、そんなことをしている間に、誰かが立候補してしまうかもしれない。今回に限っては、自分で立候補しようと、千波は決心していた。でも、始まってみないと、気弱な自分が、本当に立候補できるかどうかわからない。千波は、学級会が始まってから、ずっとドキドキしていた。

最初に、男女二人のクラス委員を選出する。その他の委員は、新クラス委員が議事進行をして決めてゆくことになる。

クラス委員を決めている間、千波は次の委員決めのことを考えて、ほとんど⁽⁴⁾上の空だった。後で考えると、それが失敗のもとだった。

三年A組の女子クラス委員は、澄香と早川和美が推薦されて争い、二票差で早川さんに決まった。

早川さんは、成績がいい真面目な人という印象だった。クラス委員というのは、そういうタイプの人がいいんじゃないかと、千波は内心思っていた。それでも、もちろん千波は、友だちの澄香に一票を入れた。

澄香を推薦したのは、同じ六人グループの緑だった。緑がすつと手をあげて、澄香をクラス委員に推薦した時、千波は本当なら、自分が推薦してあげるべきだったかなと思った。

おそらく、それは当たっていただろう。学活が終わった後、澄香のもとに駆け寄った緑に、澄香はすかさずこういったからだ。

「緑、推薦してくれてありがとう。すごく嬉しかったよ。」

「残念だったね。」

「あとちょっとだったのに。」

亜矢や風子は、小声でそういったが、千波はそういう時に何かをいうのが苦手で、黙っていた。

すると、澄香は亜矢に向かって、こういった。

「亜矢さあ、委員になんなくてよかったじゃん。三年生はもう受験勉強だつてあるし、部活だつてがんばんなきゃいけないし、余計な委員会活動なんてやらないですめば、その方がいいんだよ。」

亜矢は風子から図書委員に推薦されたのに、自分からおりてしまったのだ。

他の委員決めが始まった時、千波は思いきって

B

手をあげると、

「あの、図書委員に立候補します。」

といった。ほんとうに心臓が破裂しそうで、声が上がってしまったほど緊張

95

90

85

80

75

70

65

張した。

ところが、千波とほとんど同時に、手をあげた人がいたのだ。風子だった。風子は、千波の後、

C いった。

「図書委員に佐々木亜矢さんを推薦します。」

千波はそれを聞くと、驚いて頭にカーッと血が上がった。まさかそんなことが起こるなんて、夢にも思っていなかった。

亜矢と風子はとても仲がいい。ということは、おそらく亜矢が、図書委員になりたいので推薦してと風子に頼んだのだろう。

でも、一体どうして……。亜矢は二年生の時も図書委員だったけれど、貸し出し当番の時など、サボってばかりいた。誰が見たって、あまり熱心に活動しているようではなかった。

それなのに、三年生でもう一度図書委員をやりたいなんて、亜矢の真意がつかめなかった。委員は義務ではないのだ。やりたくない人はやらなくてもいいものなのに。

教室の中は、一瞬静まりかえった。が、すぐに議長が、

「他の委員も、立候補、推薦どんどん出してください。」

といったので、みんなの注意は亜矢と千波から他に移った。放送、風紀、広報、保健、整備委員などに、次々に立候補したり、推薦されたりする人が出て、教室の中にはぎやかになった。

けれど、その最中もずっと、千波はどうしよう、どうしようと懸命に考えていた。思いがけない展開に、頭の中がまとまらなかった。

図書委員はやりたい。だけど、亜矢にしろ、他の誰にしろ、票を争ってまでやりたいとは思わなかった。争って、どちらかが気まずい思いをするくらいなら、図書委員をやらずにガマンする方がましだ。

千波も、亜矢と同じように推薦されていたのだとしたら、迷うことなくおりていただろう。でも、千波は自らすすんで立候補したのだ。立候補しておいて、すぐにおりるというのも無責任な気がして、困ってしまった。

とうとう、議長の島崎君が、

「他に立候補する人や、推薦する人、いませんか？」

誰も何も言わなかった。もう出つくしたのだ。

「それでは、まず図書委員から、投票で決めたいと思います。」

その時だった。亜矢がすばやく手をあげて、いったのだ。

125

120

115

110

105

100

130

「あのう、せっかく推薦してもらったのだけど、私おりますので、図書委員は長谷川千波さんをお願いします。」

千波と亜矢の他に、図書委員候補はいなかった。

そして、千波がぼかーんとしている間に、念願の図書委員に決まった。けれど、そのことを喜ぶよりも、亜矢に対して申し訳ないことをした、という気持ちの方が強かった。

さらに、澄香が亜矢に対していった、「委員になんなくてよかった」という言葉を聞いた時、千波は自分が暗に批判されたような気がした。図書委員になったことを、快く受け入れられていないのを感じた。千波に一言も声をかけなかったのが、その証拠のように思われた。

千波は、後で亜矢に、

「ゴメンね。ありがとう。」

とD言った。

亜矢は笑って、

「ううん。そんなこと全然気にしないでよ。」
と喋ってくれた。

澄香もその日の放課後、何もなかったように、

「千波、部活に行こっ。」

と誘ってきた。

千波はそれで少しはホッとしたものの、⁽⁶⁾心の中はすっきりと晴れなかつた。

(三輪裕子『優しい音』)

150

145

140

135

問一

——(1)「千波と澄香はいつも連れだって歩いているようになった。」とありますが、このことが招いた環境の変化に対して、千波はどのように感じていますか。ふさわしいものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 澄香と親友になったことによって千波を見る周囲の目が変化したことに対して、千波は自分自身が変わったことを確信し、清々しさと緊張を感じている。

イ 澄香が仲良くしてくれることで千波の交友関係が広がり、周囲からの注目を得られるようになったことに対して、自分が主役になったような高揚感と気まずさを感じている。

ウ 澄香が仲良くしてくれることで自然と千波の周囲に人が集まるようになり、クラスで目立つ存在となったことに対して、気恥ずかしさと居心地の悪さを感じている。

エ 澄香と親友になったことによって舞台のメインキャストのようにクラスの中に居場所が与えられたことに対して、晴れがましさを感じつつも劣等感を抱いている。

問二

——(2)「間違ったこと」とありますが、それはどのような内容ですか。ふさわしくないものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 親友であるはずの千波が自分の委員決めのことに気を取られて、澄香をクラス委員に推薦しなかったこと。

イ 澄香がクラス委員から落ちてしまったことに対して、上手く励ましの言葉をかけてあげられなかったこと。

ウ 親友であるはずの千波がクラスメイトに声をかけて、澄香がクラス委員になれるように取り計らってあげられなかったこと。

エ 澄香がクラス委員から落ちてしまった状況で、自分が立候補した図書委員に決まったこと。

問三

——(3)「今回だけは、自らすすんで図書委員に立候補しよう」とありますが、千波が中学校で図書委員の仕事をする最後の期間である三年前の委員決めで立候補しようとしたのはなぜですか。解答らんに三行以内で説明しなさい。

問四

——(4)「上の空」とありますが、空模様に関する次の一から五の成句の意味を、後の「意味」ア～オの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。

- 一 青天のへきれき
- 二 雨降つて地固まる
- 三 花に嵐あらし
- 四 雲をつかむよう
- 五 風雲の志

〔意味〕

- ア 思いもよらない、とつぜんの出来事や事件。
 イ ばくぜんとしていることのとえ。
 ウ 悪いことや嫌いやなことの後に、かえってよい状態になること。
 エ よいことには、じやまが入りやすいことのとえ。
 オ 何か変わったことが起こりそうな事態を利用して、大きなことをしようとする。

問五

——(5)「頭にカーッと血が上った。」とありますが、この時の千波の様子を解答らんに一行以内で説明しなさい。

問六

——(6)「心の中はすつきりと晴れなかった。」とありますが、それはなぜですか。解答らんに五十字以内で説明しなさい。

問七

〔A〕〔D〕に当てはまる語を次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。(ただし記号は一回ずつ使用します。)

- ア 真まつ先に イ おおずおおずと
 ウ 間かん髪ぱついれずに エ ここつそり

問八

本文に合うものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 千波は気弱かつ卑屈ひくつな性格で、誰かの陰かげに隠かくれながら事が終わるのをこつそりと待ち、後でそれを嘆なげいてしまうようなところがある。

イ 千波は賢かしこく優柔ゆうじゆう不断ふだんな性格で、あらゆる可能性を考慮こうりよするあまり迷ってばかりいて、自分なりの意思を持っていないところがある。

ウ 千波は思慮しりよ深く責任感のある性格で、常に自分がすべきことや正しいと思うことは何か考え、信念をもって行動にうつすところがある。

エ 千波は控ひかえめかつ真面目まじめな性格で、争いを避けることと責任を果たすことの間で揺れ動き、かえって決断に悩なやむようなところがある。

